

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月26日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21402015

研究課題名（和文） 南アジア系移民の政治動員における宗教の役割

研究課題名（英文） The Role of Religion in Political Mobilization of the South Asian Diaspora

研究代表者

広瀬 崇子（HIROSE TAKAKO）

専修大学・法学部・教授

研究者番号：20119431

研究成果の概要（和文）：

本研究は、パキスタンのカシミール出身のムスリム、インドのパンジャーブ出身のシク教徒、スリランカのタミル人移民の政治動向を宗教との関係から分析した。現地調査を行った結果、ディアスポラ・コミュニティのアイデンティティ形成、宗教施設の利用目的および方法、政治活動などの面において、きわめて多様な様相を示すことが明らかとなった。変数にとらえられるものとしては、本国での紛争の争点、移民の歴史の長さ、ディアスポラ人口の大きさ、紛争終結後の本国および国際社会の動向、ホスト国の移民政策、マイノリティ政策、そしてグローバル化が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：

This study has analyzed the political activities of three South Asian diaspora communities, namely the Kashmiri Muslims, the Sikhs and the Sri Lankan Tamils, with a special attention to the role of religion. The ethnic identity, the use of religious institutions and political activities in both their host and home countries vary among the three communities. Main variables are considered to be the characteristics of the ethnic conflict in their home country, the nature of religion, immigration and minority policies of the host country, the efforts of the host country and the international community to reconstruct the conflict affected region and the impact of globalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2010年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2011年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
年度			
年度			
総計	12,500,000	3,750,000	16,250,000

研究分野：南アジアの政治・外交

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：南アジア、ディアスポラ、宗教施設、移民政策、マイノリティ、多文化主義、グローバル化、エスニック紛争

1. 研究開始当初の背景

研究代表者および分担者は、南アジアの国

民国家の変容に関する研究を長年行ってきており、その延長として2006年度～2008年

度にはグローバル化に伴うディアスポラと本国のエスニック紛争との関わりを研究した。その結果、本国のエスニック紛争へのディアスポラの関わり方は多様であり、B. アンダーソンの言う「遠隔地ナショナリズム」といった概念でくくることはできないことが明らかとなった。

欧米、特にアメリカ、カナダ、英国に住む南アジア系移民は、近年急速に経済力をつけ、社会的地位を向上させてきた。彼らの多くは政界に進出したり、ロビー活動を行うなど、移住先の国（ホスト国）での政治活動を活発化させたのみならず、グローバル化の進展とともに、本国の政治にも多大なる影響力を行使するようになった。他方、こうした主流からはずれた人間の中にはテロ活動に関係する人間も現れた。概してディアスポラは自らの生活を守るために、直接・間接的に政治的関心が高い層が多いことも明らかとなった。

政治活動を効果的に行うためには、ディアスポラの多数を政治動員する必要があるが、宗教を基盤としたアイデンティティを強く持っている南アジア系移民の場合、動員の際に宗教が重要な役割を果たすことが多い。

以上のような認識から、本研究は、南アジア系移民の政治活動における宗教の役割を解明することとした。

1. 研究の目的

本研究は、北米およびイギリス在住で、インドのパンジャール州出身のシク教徒、パキスタンのカシミール地方出身のイスラーム教徒、スリランカ出身のタミル人のヒンドゥー教徒の政治動向を宗教との関係から解明することを目的とした。

具体的には、第1に、移民した時期、ホスト国での経済的・社会的地位の差によりディアスポラの態度が大きく異なることに着目し、それらを変数・関数にとらえて、その関係性に一定の規則性が見いだされるかを分析することである。

第2の課題は、グローバル化とディアスポラの行動様式の関係である。グローバル化の進展とともに、特定のエスニック・グループのネットワーク化が進んでおり、それに伴ってアイデンティティの変化も起きている。その実態を明らかにすることが第2の目的であった。

第3に、研究の直接の対象地域は、北米、とイギリスであるが、それらの国におけるディアスポラの状況を相対的に位置づけるために、他の地域との比較を行うことも重要な課題であった。

第4に、ホスト国の政策の変化を分析する。それまで多文化主義を推進していたカナダや、各エスニック・コミュニティにかなりの自由を与えてきたイギリスも、9.11 同時多発

テロ以降、その政策の転換を迫られるようになった。ホスト国の政策自体がどのように変化したか、そしてその政策の変化がエスニック・コミュニティにどのような影響を及ぼしたかを考察することが重要であるとの認識を共有していた。

2. 研究の方法

研究の方法は、第1に先行研究を整理し、我々の研究を先行研究との関係で位置づけることである。南アジア系ディアスポラ研究自体は膨大な量に及ぶが、宗教との関係で扱っているものはほとんどない。そのため、南アジア系ディアスポラ研究、南アジアにおける宗教と政治の関係、一般のディアスポラと宗教といった関連の研究を通じて、本研究の参考とすることとした。

第2に、本研究の特徴である現地調査である。イギリス、カナダにおける宗教施設の調査とインタビュー、また地域の福祉・教育政策を行っている施設の調査および担当者のインタビューを行うことである。なお、2009年5月にスリランカの内戦が終結したために、それまでは困難であった現地調査が可能となった。

以上の方法で入手した資料を整理し、3つのコミュニティごとにディアスポラの政治とのかかわり、そこにおける宗教の役割をまとめ、その上で、3者の比較を行うこととした。

3. 研究成果

研究は資料を収集し、それを共有することから始め、海外現地調査によって3つのエスニック・コミュニティの状況認識、アイデンティティの変化、政治的関心、戦略および最新の動向を把握することとした。年平均4回の研究会で情報を共有するとともに共同で現地調査を行い、そこで得た資料や情報を基に議論を重ねた。

現地調査は、イギリス2回、カナダ1回、それに比較の目的で最も古い移民を抱える南アフリカと最近の移民の目的地として重要性を増しつつあるオーストラリアで行った。なお、スリランカ・タミルについての調査は、本国での紛争が政府による武力制圧という形で一応の決着を見たために、以前に比べ比較的容易になった。

これらの調査研究の結果得た知見は以下の通りである。

(1) 3つのエスニック・コミュニティのアイデンティティと宗教：

- ① タミル人ディアスポラのアイデンティティ形成における宗教の役割はほとんどない。紛争の発端から言語問題の方が重要であり、現在に至るまで宗教が果たした役割は極めて小さ

- い。
- ② シク教徒ディアスポラは、本国の紛争によって強められてきた。1984年のインド政府によるブルースター作戦以降、ディアスポラの中でもターバンを巻き、髭を生やす人間が増えた。またグルドワラ（シク寺院）がコミュニティ形成に果たす役割は極めて大きい。
 - ③ カシミール・ディアスポラは、インド国内のカシミール紛争、9.11事件などを通して宗教がより強調されるようになってきている。その際、イスラーム教徒としてのアイデンティティは、カシミール・ムスリムからグローバル・ムスリムへと変容してきている。その背後には、9.11事件やその後のホスト国（イギリス）の政策、グローバルなイスラームのテロの問題がある。
- (2) 宗教施設の役割：
- ① タミル・ディアスポラは、宗教施設を政治的に利用することはほとんどなく、地域社会の福祉施設やコミュニティ・センターなどが活動の場となっている。
 - ② シク教徒にとって宗教施設は極めて重要である。しかし、宗教施設は必ずしも宗教目的ではなく、教育、福祉の目的で多く利用されている。ただし、本国の紛争絡みでの献金などにも使われている。
 - ③ カシミール・ムスリムの利用するモスクは宗教の性質上、すべてのムスリムに開放されているため、カシミール紛争との関係で直接的に利用されることはない。むしろグローバル・ムスリムのアイデンティティを強める場を提供している。
- 以上の観察から、宗教とエスニック・コミュニティの関係は多様であり、一概に宗教施設を利用したディアスポラ動員といった結論は危険であることが明らかとなった。
- (3) ホスト国の政策転換とディアスポラの政治活動：ホスト国の移民政策、マイノリティ政策が多文化主義の見直しに転換しつつある中、ディアスポラの政治行動も対応を迫られている。
- ① タミル・コミュニティは、本国（スリランカ）での紛争終結に伴い、本国のタミル人居住地の復興へと政策を転換しつつある。その際、タミル人ディアスポラが有する資源は貴重となる。
 - ② シク教徒は、ホスト国での露骨な過激グループの支援は自らの生活の維

持にも障害となること、インドの国際的地位の向上に伴い、インド政府に真向から敵対することの COST の高さから、本国での紛争への支援はより間接的なものへと変わりつつある。一方、本国のシク教徒の多くは、パンジャブ州およびインド国家への期待を減少させ、自らが国外脱出することを目標としている。移民先としては、カナダ、オーストラリアが有力候補である。

- ③ ムスリムの政治活動は 9.11 同時多発テロ後困難になってきた。その状況下で、自らの生活確保を目指す者と、グローバルなイスラーム運動（テロ活動を含む）へと向かう者が現れている。

以上の観察により、本国に紛争を抱えているエスニック・グループの動向の多様性が浮き彫りにされた。現在これらの観察に基づく論文を各自執筆中である。最終的には単行本としてまとめる計画である。

- (4) 他地域との比較：最も古い南アジア系移民を抱える南アフリカと最近のインドからの移民の目的地として重要性を増しているオーストラリアとの比較

- ① 南アフリカは奴隷制度が廃止された後の労働力の不足を補う必要性からインド各地の低カースト出身者を中心に「契約労働者」として、イギリスが半強制的に移民させた人間の子孫が中心であるが、南アフリカのアパルトヘイト政策により国自体が孤立していたこともあって、南アフリカのディアスポラは本国との関係は完全に断絶している。しかし、南アでの彼らの生活は白人と黒人に挟まれて常に厳しく、現在では再移民すらも考慮するようになった。それでもインドへの帰還はオプションにはなく、オーストラリアなどが最有力候補である。
- ② 本国との関係をほぼ完全に断ち切られた南アの旧英領インドからの移民は、印パ分離独立の影響をほとんど受けていない。パキスタンを母国と認識するディアスポラは存在せず、宗教は重要とは認識されていない。人種が宗教に優先する状態である。
- ③ オーストラリアは近年インドからの移民先としては人気が高いが、近年インド人移民が攻撃を受ける事件が発生している。両国間の外交問題にも発展しているが、実情としては、経済・社会的要因の方が、出身地の問題よりもはるかに重要である。

(5) 暫定的結論：

- ① 南アジア系ディアスポラのアイデンティティ形成における宗教の役割は、本国での紛争の争点によって大きく異なる。
- ② 宗教の特性—国家と宗教の関係、地理的要因など—によって、ディアスポラの政治活動における宗教の意味が異なる。
- ③ 本国の紛争地域の復興に対する姿勢はシク教徒とタミル人では大きく異なるが、それは移民の歴史の長さ、ディアスポラ人口の大きさとネットワーク、紛争終結後の本国および国際社会の動向によるところが大きいと考えられる。
- ④ ホスト国の移民政策、マイノリティ政策によってディアスポラの政治行動は大きく左右される。
- ⑤ グローバル化の影響を最も強く受けているのはカシミール・ムスリムである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

1. 伊藤融、「インドの『世界大国化』とパキスタン関係」、『現代インドの国際関係—メジャー・パワーへの模索』、査読無、2012年、105-131頁
2. 伊藤融、「なぜインドとパキスタンは対立するのか?—カシミールをめぐる戦い」、『現代南アジアの政治』、査読無、2012年、148-162頁
3. 伊藤融、「パキスタン軍と印パの核問題」、『現代南アジアの政治』、査読無、2012年、163-178頁
4. 伊藤融、「南アジアの地域協力—繁栄と平和の礎か?」、『現代南アジアの政治』、査読無、2012年、214-226頁
5. 広瀬崇子、「パキスタン—国家のアイデンティティとイスラームの挑戦—」、『世界政治叢書7：南部アジア』、査読無、2011年、132-148頁
6. 広瀬崇子、「インド—グローバル化への対応と民主主義の強化—」、『世界政治叢書7：南アジア』、査読無、2011年、201-220頁
7. 伊藤融、「地域協力の鍵を握るインド—SAARC、環インド洋、BIMSTEC—」、『世界政治叢書7：南アジア』、査読無、2011年、257-272頁
8. 広瀬崇子、「台頭するインドの対中外交」、『ディフェンス』、査読無、2010年、第29号、84-91頁

9. 石川一雄、「カナダのインド系ディアスポラとそのトランスナショナル空間の位相」、『専修法学論集』、査読無、第110号、2010年、1-39頁
10. 石川一雄、「カナディアン・シク・ディアスポラ—2010年1月～6月の風景—」、専修大学法学研究所『所報』、査読無、第41号、2010年、1-34頁
11. 伊藤融、「インドとパキスタン、アフガニスタン」、『軍事大国化するインド』、査読無、2010年、99-117頁
12. 石川一雄、「セキュリティゼーションと移民ガバナンス」、『専修法学論集』、査読無、第109号、2010年、1-25頁
13. 北川将之、「マイクロファイナンスと陳情行動—インド・バンガロール農村県の村民集会の事例から」、『女性学評論』、査読無、第24号、2010年、99-121頁
14. 広瀬崇子、「核拡散をめぐる国際政治：インド・パキスタンの核兵器開発を中心に」、『日本原子力学会誌』、査読有、Vol. 51 No. 10、2009年、21-24頁
15. 広瀬崇子、「深刻化するパキスタンのテロ問題」、『中東研究』、査読無、第506号 Vol. 3、2009年、3-10頁

[学会発表] (計 26 件)

1. 広瀬崇子、「南西アジアの安全保障—反米機運とタリバーン」、(財) 平和安全保障研究所主催月例研究会、2012年3月16日、平和安全保障研究所会議室
2. Takako Hirise, “Japanese Perception of Pakistan”, Lahore University of Management Studies, Lahore, Pakistan 主催, Feb 23 2012, LUMS
3. Takako Hirose, “Japanese Perception of Pakistan”, Department of Humanities, COMSATS Institute of Information Technology 主催, Feb 21 2012, COMSAT, Islamabad
4. 広瀬崇子、「インド政治の現状と課題」、(株) サン・アンド・サンズ・アドヴァイザーズ主催：「丸の内ビジネス講座」、2012年2月8日、新丸の内ビルディング10階 日本創生ビレッジ
5. 広瀬崇子、「大国化するインド」、国立国会図書館主催講演会、2012年2月6日、国会図書館会議室
6. 広瀬崇子、「南アジア情勢と日本の安全保障政策」、内閣官房安全危機管理室主催：内閣官房安全保障勉強会、2012年1月17日、内閣官房安全危機管理室会議室
7. 広瀬崇子、「台頭するインド」、財務省講演会、2012年1月11日、財務省内会議室
8. 広瀬崇子、「日本から世界、そして未来

- へ)、防衛省主催：自衛隊国際協力開始20周年記念シンポジウム、2011年12月12日、エプソン品川アクアスタジアムステラホール
9. 広瀬崇子、「印中関係の現状と今後の展望」、現代日中問題研究会、2011年12月7日、ホテルニューオータニ
 10. 広瀬崇子、「印パ対立の様相とテロ問題—パキスタンを中心に」、隊友会主催：第38回防衛セミナー、2011年10月14日、新宿損保ジャパンビル
 11. 広瀬崇子、「パキスタン情勢と核管理問題」、経済産業省講演会、2011年9月26日、経済産業省
 12. 伊藤融、「日印関係」、日本防衛学会、2011年6月4日、慶應義塾大学
 13. 広瀬崇子、「インド大国化のインパクト—アジアにおける国際関係の新展開」、アジア政経学会、2011年5月21日、獨協大学
 14. 伊藤融、「グローバル化するインド外交—『世界大国』を目指して」、アジア政経学会、2011年5月21日、獨協大学
 15. Takako Hirose, “Strategic partnerships and security architecture in East Asia”, I F R I (フランス国際問題研究所) 主催、The Strategic Observatory of Northeast Asia Annual Conference, May 17 2011, IFRI (パリ)
 16. Takako Hirose, “Japanese Nuclear policy and Japan-India Nuclear Cooperation”, Institute of Peace and Conflict Studies, Feb 17 2011, New Delhi
 17. 広瀬崇子、「原子力平和利用と核不拡散にかかわる国際フォーラム」パネル “Nuclear Cooperation with Non-NPT States” のパネリスト、国際問題研究所及び東京大学共催国際フォーラム、原子力研究開発機構、2011年2月3日、東京学士会館
 18. 広瀬崇子、「ユーラシア地域大国の安全保障戦略」討論者、日本国際政治学会、2010年10月31日、札幌コンベンションセンター
 19. 広瀬崇子、“Islamism and Terrorism in Pakistan: From a Gender Perspective” のコメンテーター、UNU-ISP、2010年10月25日、UNU
 20. 広瀬崇子、日本政治学会パネル「G20の政治」討論者、日本政治学会、2010年10月10日、中京大学名古屋キャンパス
 21. 伊藤融、「グローバリゼーションと格差—国際政治学の視点から」、日本南アジア学会、2010年10月3日、法政大学多摩キャンパス
 22. 広瀬崇子、「原子力の国際展開と不拡散問題」、(財)エネルギー総合工学研究所主催、エネルギー総合工学シンポジウム、2010年9月30日、千代田放送会館
 23. Takako Hirose, “Japanese Security & Defence Policy”, National Maritime Foundation, Sep 7 2010, New Delhi
 24. 伊藤融、「アジアにおける力の移行—インドの視点」、国際安全保障学会、2009年12月5日、同志社大学(京都府)
 25. 伊藤融、「大国化するインドの対大国外交」、日本国際政治学会、2009年11月7日、神戸国際会議場
 26. 広瀬崇子、「核拡散をめぐる国際政治：インド、パキスタンの核兵器開発を中心に」、日本学術会議・原子力学会、原子力総合シンポジウム、2009年5月28日、日本学術会議講堂
- 〔図書〕(計3件)
1. 山影進、広瀬崇子共編著、ミネルヴァ書房、『世界政治叢書7：南アジア』、2011年、総304頁(上記広瀬論文2本、伊藤論文1本掲載)
 2. 広瀬崇子、北川将之、三輪博樹共編著、勁草書房、『インド民主主義の発展と現実』、2011年、総284頁(広瀬執筆26-33頁、伊藤執筆64-65頁、98-104頁、144-151頁、北川執筆13-25頁)
 3. 伊藤融、有信堂、『東アジアの国際関係—多国間主義の地平』、2009年、総262頁
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
広瀬 崇子 (HIROSE TAKAKO)
専修大学・法学部・教授
研究者番号：20119431
 - (2) 研究分担者
石川 一雄 (ISHIKAWA KAZUO)
専修大学・法学部・教授
研究者番号：6009552
伊藤 融 (ITO TORU)
防衛大学校・人文社会科学群・准教授
研究者番号：50403465
北川 将之 (KITAGAWA MASAYUKI)
神戸女学院大学・文学部・講師
研究者番号：00365694
 - (3) 連携研究者
()
研究者番号：